Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences) 2008, Vol. 55, 167 − 178.

心理臨床家のアイデンティティと養成教育

森田美弥子・岩井志保[1)]・松井宏樹[2)]・直井知恵[3)]

1．問題と目的

近年、社会的な課題に心理学の立場から取り組む研究者や臨床家へのニーズが高まっている。心理臨床家を養成する大学院の役割の重要度も増してきたと言える。

日本における臨床心理学の成り立ちは、1950年代に遡る。黎明期を経て、1964（昭和39）年に日本臨床心理学会が設立され、資格化についても検討されていた。しかし、その5年後には大学紛争時代の反体制運動の影響を受け、学問体系としての臨床心理学やその組織の充実は、いったん動きが止まっていた。

現在の臨床心理学の実践や研究は、1982年に「日本心理臨床学会」が、1988年に「日本臨床心理士資格認定協会」が、1989年には「日本臨床心理士会」が設立されたことにより、発展してきた。さらに、1996（平成8）年には認定協会による「臨床心理士養成指定大学院制度」、2001（平成13）年には「指定大学院連絡協議会」が発足し、教育体制が整備されてきた。

乾（2003）は、これまでの臨床心理士養成制度についての歴史を、第1期（準備期）、第2期（基礎構築期：日本心理臨床学会成立以後）、第3期（養成制度の拡充期：スクールカウンセラー委託研究事業開始以後）、第4期（安定発展期：指定大学院連絡協議会発足以後）の4期に分け、第1〜2期にあたる1985年頃までを「臨床家の個人的努力」や「各大学・大学院の独自の臨床教育」による研鑽が主であった時代と位置づけている。

その後も指定大学院カリキュラムに関する検討が重ねられ、臨床心理面接、査定、それらの実習などを必須とするミニマム・スタンダードは確立され、現在は専門職大学院を含めて約160校で臨床心理士の養成が行われている。また、学会や臨床心理士会等による研修会も数多く開催されるようになり、専門的知識や技法の学習機会は確実に増加し、充実してきている。

しかし、制度や教育研修の充実と臨床家自身の内的アイデンティティの確立は、単純に相関するものではない。元・日本臨床心理士会会長であり、資格認定協会理事でもあった河合隼雄先生は、折にふれ「臨床家としての実をあげること」が重要と説いておられた。認定協会発行の「臨床心理士になるために」の冒頭には次のような一節がある。「…ここで大切なことは人間の個性を尊重しようとする限り、誰にも通用する一般法則や技法というものは存在せず、常に個々の場合に応じた判断と行動を必要とされることである。ここが臨床心理士にとって極めて大切であり、また困難な点でもある」（河合、2005）。人間を相手にする以上、一般原則に加えて個別事例に応じた柔軟な判断が必要となり、機械的な対応はできない。そのことが、一方では主観的・恣意的な判断をする危険性を常に孕んでおり、臨床家の側は「自分」のあり方を問われ続けることになる。それは、知識と技法のみで充足しつくせない「人間」の部分だと言える。そうした側面を視野に入れた職業人としての成長発達のプロセスを、大学院教育はどのように支援し得るのだろうか。

そこで、大学院教育とそこで学ぶ大学院生の臨床家アイデンティティの発達の関連について検討することを目的とし、平成19年度教育発達科学研究科長裁量経費により、(1) 臨床心理学を専攻する大学院生を対象とした調査を実施し、(2) アメリカの養成教育プログラムに関する講演会を開催した。本論文では、調査結果および講演概要を報告し、心理臨床家のアイデンティティ形成のために養成教育の中で何が必要とされるかという観点から検討する。

2. 現役大学院生は臨床家アイデンティティをどのようにとらえているか

臨床心理学を専攻する大学院生が考える、心理臨床家アイデンティティの内容とそこに影響を及ぼした体験に

1）名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（後期課程）
2）名古屋大学大学院教育発達科学研究科大学院研究生
3）Stars Community Services

ついて分析した。

【方　法】

調査協力者：臨床心理士養成第一種指定大学院であるN大学大学院の臨床心理学領域に所属する博士課程前期課程および後期課程に所属する大学院生51名（博士課程前期課程29名、博士課程後期課程22名。女性42名、男性9名）。

調査手続き：2007年度前期に上記大学院で開講されていた授業の1つにおいて、受講している大学院生に「あなたにとって、心理臨床家としてのアイデンティティとはどのようなものですか。これまで学んできたこと、体験してきたことをふまえ、現時点での考えを自由に論じなさい」という課題でレポートを書いてもらった。

分析方法：まず、各レポートの記述者の氏名その他個人が特定される部分を削除し、学年については分類作業が終わるまでブラインドにした上で、臨床心理学領域の教員1名および大学院生1名が、提出されたレポートの中から、以下の2点に関する記述を抽出した。

1)アイデンティティの内容（心理臨床家の役割、特徴、心理臨床家として自分がしていること、そこで大切だと考えていること、理想・目標とする心理臨床家像など）

2）1）のアイデンティティに影響を及ぼしている体験

この段階で、アイデンティティの内容については、107個の記述が抽出され、アイデンティティに影響を及ぼしている体験・経験については、89個の記述が抽出された。

続いて、上記2名の分析者がそれぞれ、抽出された記述を内容に基づいて分類を行った後、それをもとに両者で話し合い、カテゴリーを生成した。さらに、別の大学院生が、生成されたカテゴリーに対し、抽出された記述を分類した。アイデンティティ内容のカテゴリー分類において、3名の分類が一致した記述が49.5％（107個中53個）、2名の分類が一致した記述が41.1％（107個中44個）であった。全員が不一致となった記述については、3名で再度検討し、2名以上が一致したカテゴリーへの分類を採用した。アイデンティティに影響を及ぼしている体験のカテゴリー分類の一致率は100％であった。

集計は学年別（後期課程1～3年／前期課程2年／前期課程1年）に行った。

【結　果】

1）心理臨床家アイデンティティの内容

心理臨床家としてのアイデンティティの内容に関する記述の分類を行った結果、「自分自身のあり方を見つめること」、「クライエントに対する姿勢を培うこと」、「専門職としてのあり方を身につけること」、「その他」の4つの上位カテゴリーが生成された（表1）。

「自分自身のあり方」の下位カテゴリーとして〈自分自身を知ること、自分自身と向き合うこと〉、〈人に対して謙虚であること、誠実であること〉、〈心理臨床家としての責任と自覚、成長意欲を持ち、努力すること〉、〈専門性と独自性とバランスが取れること〉、〈生き方と職業を重ねて将来をイメージすること〉の5カテゴリーが生成された。

「クライエントに対する姿勢」の下位カテゴリーとして、〈クライエントを尊重し、クライエント－セラピスト関係を重視すること〉、〈クライエントを理解し、分かろうとすること、アセスメントの重要性〉、〈人の内面に着目し、援助を行おうとすること〉の3カテゴリーが生成された。〈人の内面に着目し、援助を行おうとすること〉には、クライエントを援助するという心理臨床家の定義的記述が多く含まれていた。

「専門職としてのあり方」の下位カテゴリーとして、〈広い視野や柔軟性を持って対応できること〉、〈心理学の知識・技術を習得していること〉、〈臨床と研究を両立させること〉、〈他職種の専門家・専門機関と連携できること〉の4カテゴリーが生成された。連携と関連して、他職種に対していかに心理臨床家としての仕事を説明し伝えられるか、ということも複数の院生によって述べられていた。「その他」には、〈特定の機関での役割への言及〉という下位カテゴリーが生成された。

大学院の学年によって心理臨床家としてのアイデンティティの内容に関する記述に違いがあるかどうかを検討するために、後期課程、前期課程2年、前期課程1年の各群ごとに、各カテゴリーの記述数を算出した（表2）。その結果、記述数が最も多いのは後期課程で、次いで前期1年、前期2年の順となっていた。後期課程の大学院生では、「自分自身のあり方」「クライエントに対する姿勢」「専門職としてのあり方」の主要3つのカテゴリーの記述がほぼ均等に見られたのに対し、前期課程の大学院生では、それぞれ約半数の記述が「クライエントに対する姿勢」に集中していた（図1）。

下位カテゴリーで見ると、後期課程では、〈クライエントを尊重し、クライエント－セラピスト関係を重視すること〉が最も多く（22.9％）、続いて〈他職種の専門家・専門機関と連携できること〉（16.7％）となった。前期課程2年では、〈人の内面に着目し、援助を行おうとすること〉（19.2％）、〈クライエントを尊重し、クライエント－セラピスト関係を重視すること〉（15.4％）、〈クライエントを理解し、分かろうとすること、アセスメントの重要性〉（15.4％）が多かった。前期課程1年では、〈ク

表1．心理臨床家としてのアイデンティティの内容

アイデンティティ・カテゴリー		アイデンティティの記述例
自分自身のあり方を見つめること	自分自身を知ること，自分自身と向き合うこと	じっくりと相手と自分自身に向き合う。 自分の弱さや課題と向き合う。
	人に対して謙虚であること，誠実であること	謙虚な姿勢，人を好きである気持ちを忘れずに持っていたい。 支援を通じて心理臨床家も成長させてもらっている（ということを意識する）。
	心理臨床家としての責任と自覚，成長意欲を持ち、努力すること	その時点での自分に満足することなく自己鍛錬を進めていく努力をする。 心理臨床家になるということを真剣に考え続けていく。
	専門性と独自性のバランスがとれること	個々によって異なる独自的な部分と心理臨床家としての基本的な柱とが個人個人で組み合わさる。 心理臨床以外に一個人としてきちんと生きる。
	生き方と職業を重ねて将来をイメージすること	（自身の）人生を豊かにすることが（心理臨床に）反映される。 心理臨床という仕事を通じて，また様々なクライエントと出会いながら，何かを得て自己実現をしていけるようなもの。
クライエントに対する姿勢を培うこと	クライエントを尊重し，クライエント－セラピスト関係を重視すること	クライエントがいかに生きるかということを，共に考え支える。 クライエントの語る話にしっかりと耳を傾け，クライエントの体験している内的現実を尊重する。
	クライエントを理解し、わかろうとすること アセスメントの重要さ	クライエント個人の特性を見て，一人の個人としての全体性を捉える クライエントという一人の人間を時間軸･空間軸で理解しようとする。
	人の内面に着目し，援助を行おうとすること	あらゆる情報，背景や現在の症状などを総合的に加味した心理学視点を持った関わりを行う。 日常とは違う空間・体験を提供することができる存在である。
専門職としてのあり方を身につけること	広い視野や柔軟性を持って対応できること	クライエントにとって一番有益な技法を選ぶ。 広い視野での援助．その人の状態，発達などを考え，今必要なこと，自分でどこまでできるかを見立て，必要なら他機関や人も利用し，紹介する。
	心理学の知識・技術を習得していること	予防的観点を磨き，学習を深め，技術を身につける。 様々な知識の吸収。
	臨床と研究を両立させること	研究を実践に活用する視点を意識する。 臨床と研究を結びつけた「生きた研究」を行い，還元する。
	他職種の専門家・専門機関と連携できること	他機関や他職種と連携する。 心理臨床家としての存在を異職種の中で説明していく力を持つ。
その他	特定の機関での役割への言及	クリニック･デイケアでは他職種スタッフとメンバーのつなぎ役になる。 青年期の不適応に関する、サポート体制作り，予防に努めていきたい。

ライエントを尊重し、クライエント－セラピスト関係を重視すること〉(24.2％)、〈人の内面に着目し、援助を行おうとすること〉(18.2％) が多かった。全学年を通じて、〈クライエントを尊重し、クライエント－セラピスト関係を重視すること〉が心理臨床家のアイデンティティとして重要視されていた。

2) 心理臨床家アイデンティティ形成に影響を与える体験

心理臨床家としてのアイデンティティの形成に影響を及ぼした体験に関する記述の分類を行った結果、「心理臨床経験全般」、「大学院の教育」、「大学院外での心理臨床経験」、「研修会等への参加」、「研究活動」、「周囲の人間関係」の6カテゴリーが生成された。

大学院の学年によって影響体験に関する記述に違いがあるかどうかを検討するために、後期課程、前期課程2年、前期課程1年ごとに、各カテゴリーの記述数を算出した（表3)。その結果、後期課程の大学院生では、「心理臨床経験全般」という記述が最も多く（29.5％)、続いて、「大学院外での心理臨床経験」(27.3％)、「大学院の教育」(18.2％)となった。前期課程2年の大学院生では、「大学院の教育」が最も多く（32.0％)、続いて、「大学院外での心理臨床経験」(24.0％)、「心理臨床経験全般」･「周囲の人間関係」（いずれも16.0％）となった。前期課程1年の大学院生では、「大学院の教育」がもっとも多く（55.0％)、続いて、「研修会等への参加」･「周囲の人間関係」(いずれも20.0％)となった。前期課程1年で「心理臨床経験全般」「大学院外での心理臨床経験」がほとんど見られないのは、調査時期が7月末であり、大学院

表2．心理臨床家としてのアイデンティティに関する記述のうちわけ

記述数（%）

学年			博士後期課程（22名）	博士前期課程2年（14名）	博士前期課程1年（15名）
アイデンティティカテゴリー	自分自身のあり方	自分自身を知ること，自分自身と向き合うこと	4（8.3）	2（7.7）	1（3.0）
		人に対して謙虚であること，誠実であること	5（10.4）	1（3.8）	0（0.0）
		心理臨床家としての責任と自覚，成長意欲を持ち，努力すること	3（6.3）	1（3.8）	3（9.1）
		専門性と独自性のバランスがとれること	2（4.2）	2（7.7）	2（6.1）
		生き方と職業を重ねて将来をイメージすること	2（4.2）	1（3.8）	1（3.0）
	クライエントに対する姿勢	クライエントを尊重し，クライエント－セラピスト関係を重視すること	11（22.9）	4（15.4）	8（24.2）
		クライエントを理解し、わかろうとすること.アセスメントの重要さ	0（0.0）	4（15.4）	3（9.1）
		人の内面に着目し，援助を行おうとすること	3（6.3）	5（19.2）	6（18.2）
	専門職としてのあり方	広い視野や柔軟性を持って対応できること	4（8.3）	1（3.8）	3（9.1）
		心理学の知識・技術を習得していること	2（4.2）	1（3.8）	1（3.0）
		臨床と研究を両立させること	3（6.3）	2（7.7）	1（3.0）
		他職種の専門家・専門機関と連携できること	8（16.7）	1（3.8）	2（6.1）
	その他	特定の機関での役割への言及	1（2.1）	1（3.8）	2（6.1）
計			48	26	33

表3．心理臨床家としてのアイデンティティに関する記述のうちわけ

記述数（%）

影響体験カテゴリー	心理臨床経験全般	大学院の教育	大学院外での心理臨床経験	研修等への参加	研究活動	周囲の人間関係	計
影響体験例	・ケースを担当したこと ・クライエントの言葉	・心理臨床実習 ・スーパーヴィジョン ・ケースカンファレンス	・心理臨床の場での非常勤職の経験	・学会，研修会への参加 ・研究会への参加 ・文献を読む		・家族や友人との関係 ・ボランティア経験 ・家庭教師経験	
博士後期課程（22名）	13（29.5）	8（18.2）	12（27.3）	4（9.1）	2（4.5）	5（11.4）	44
博士前期課程2年（14名）	4（16.0）	8（32.0）	6（24.0）	2（8.0）	1（4.0）	4（16.0）	25
博士前期課程1年（15名）	1（5.0）	11（55.0）	0（0.0）	4（20.0）	0（0.0）	4（20.0）	20

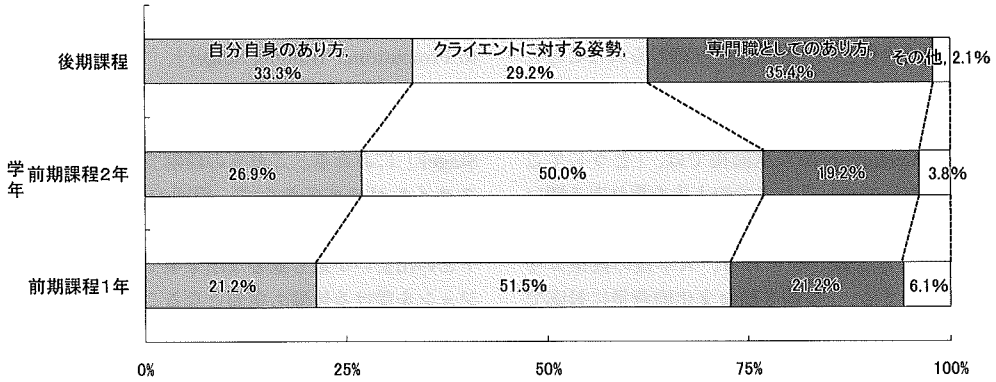

図1．心理臨床家のアイデンティティに関する記述の学年間比較

入学後半年間の準備期間を経て相談室でのケース担当をし始める時期であったためである。

全体として、アイデンティティ形成には、「心理臨床経験全般」（ケース担当、クライエントの言葉）、「大学院の教育」（実習、スーパーヴィジョン、ケース・カンファレンス）、「大学院外での心理臨床経験」（非常勤の仕事）といった、実際にクライエントと関わる経験の影響が強いということが明らかになった。

【考　察】

臨床心理学を学ぶ大学院生によって「心理臨床家アイデンティティ」として記述された内容は、大きくは「自分自身のあり方を見つめること」「クライエントに対する姿勢を培うこと」「専門職としてのあり方を身につけること」という3側面にわたっていた。

アイデンティティとして記述される中で、「自分自身のあり方」が問われる職業として意識されることは、心理臨床家の大きな特徴だと言える。記述数は学年とともに増える傾向にあり、臨床の経験をするほどに自分自身を直視せざるを得ない職業だと言えよう。

「クライエントに対する姿勢」は、ほとんどの大学院生が記述しており、特に〈クライエントを尊重し、関係を重視すること〉は、心理臨床家の中核と位置づけられていると言える。しかし、〈クライエントを理解し、わかろうとすること〉〈人の内面に着目し、援助を行おうとすること〉については、前期課程に比べて後期課程では減少していた。「クライエントに対する姿勢」として分類されたなかで、これら二つの下位カテゴリーは、心理臨床家の定義のような教科書的記述に近いものが多く、学年があがるにつれ、セラピストがクライエントを理解する、援助するという一方向的なものから、相互性をもつ関係へと視点がシフトしていくのではないかと思われる。

また、後期課程の大学院生では、「専門職としてのあり方」の中で、特に〈他職種の専門家・専門機関と連携できること〉が増加していた。

アイデンティティ形成に影響を与える体験として、実習やケース・カンファレンス、ケース担当とそのスーパーヴィジョンなどがあげられ、現行の大学院教育で行われている臨床実践指導は大きな意味をもっていることが示された。それらを通して、クライエントに対する姿勢や関係性、専門職としての対応のあり方を学んでいる。

後期課程になると大学院生は、大学の相談室以外に多様な臨床現場を体験し、大きな影響を受けている。他職種との連携やそこで心理臨床家として何ができるか、どう伝えていくかという課題に直面することが、アイデンティティ内容とも関連していると考えられる。

3. アメリカの養成教育における心理臨床家アイデンティティ

アメリカで心理臨床家として活躍する実践家を招き、大学院カリキュラムとアイデンティティの問題をテーマとする講演会を開催した。

講演題目：「Clinical Psychologistの養成とアイデンティティの発達」

講　　師：直井　知恵氏（Stars Community Services）

開催日時：2007年12月15日（土）15：00〜17：00

講演概要：California School of Professional Psychologyにおけるpractitioner program（Psy D）について、選考（入試）、カリキュラム、学年ごとの実践課題、臨床現場

でのインターンシップなどの詳細が紹介された（資料を論文末尾に添付）。内容から、日本における大学院での心理臨床家養成教育との大きな違いと感じられたこととして、以下の2点があげられる。

自分と向き合うことの重視：California School of Professional Psychologyの入試面接では、「どうしてこの分野に進みたいのか」それまでの人生を振り返る問いかけがなされ、自分自身を知ること・自分に直面することを早い段階から意識させられる。入学後の授業カリキュラムにおいても、「多種多様な文化的背景に対応できるセラピスト育成」という方針にもとづき、人種・民族・性・障害など多様な学生、教員とのディスカッションを重ねる中で（Intercultural Awareness Development）、自分自身のあり方を問われる体験をする。

研修機関との連携：臨床実習のために大学がagencyリストをもっており、大学院生はそのリストの中から自分で行き先を選び、申し込むシステムが確立されている。日本の大学院の場合、病院や学校、福祉施設などでの実習カリキュラムがある他、前期課程2年以上になると、非常勤として学外の機関で仕事を得ることは多い。先に述べた調査結果からもそうした学外での体験は有意義なものとなっているが、体験内容について大学院（教員）が十分に把握しているわけではなく、実践教育に組み込まれてはいない。California School of Professional Psychologyでは、臨床実習は多くは無給であるが、agencyはスーパーヴィジョンを含む研修を提供する体制をもっている。

4. 今後の課題

心理臨床を学ぶ大学院生への調査結果から、心理臨床家アイデンティティの中核には「クライエントとの関係」があることが再確認された。また、前期課程から後期課程へと学年が上がるにつれ、知識や理論学習にもとづく理解の段階から、臨床の実感として学ぶ段階へと進んでいき、「自分自身のあり方」に大きく目が向いていくこと、多様な臨床現場の実際に触れ、とりわけ他職種との連携のなかで「専門職としてのあり方」を考えるようになっていくことが、明らかになった。金沢（1998）は、Skovholt, T. M. とRønnestad, M. H. が1995年に提案したセラピストの8段階を紹介している。大学院生は、第2段階「専門家としての訓練に移行する段階（Transition to Professional Training Stage）」、第3段階「エキスパートを模倣する段階（Imitation of Experts Stage）」、第4段階「条件的自律の段階（Conditional Autonomy Stage）」にあたる。これらの段階では、まだ自分なりのスタイルができておらず、周囲の影響を受けやすいこと、不安や焦りを感じやすいこと、初めてのクライエントとの出会いが最も重要な出来事であり、スーパーヴィジョンを受ける体験も重要となることなどが指摘されている。そこでは、今回の調査結果にあるような、他職種との関係には触れられていない。日本の場合、臨床心理士は、例えば医師や看護師、教師などと比べて職業としての社会的認知度が高いとは言えず、常勤職もまだまだ少ない。他職種との協働、連携をとる職場に入ることで、専門職としての自分は何をすべきなのか、何ができるのかと自問する機会が一気に増大するのかもしれない。

心理臨床家となっていく過程で、自分を振り返る作業、および臨床現場での実習のさらなる充実が必要であることは、アメリカでの大学院教育についての講演内容からも大きな示唆が得られた。今後の授業カリキュラムにおいては、自分への気づきをテーマとした体験学習や、臨床心理学的地域援助の実際を含んだ内容を取り入れていくことが有用であると考えられた。新たな改善を重ねながら、心理臨床家のアイデンティティ発達の変化プロセスをさらに検討していく必要がある。

引用文献

乾吉祐　2003　臨床心理士の基本姿勢．日本臨床心理士会・編「臨床心理士のための基礎Ⅲ　2003」1-12

金沢吉展　1998　カウンセラー―専門家としての条件．誠信書房

河合隼雄　2005　臨床心理士に求められるもの―その課題と展望．財団法人日本臨床心理士資格認定協会・監修「臨床心理士になるために」第18版．誠信書房 2-5

大塚義孝・編　2004　臨床心理学原論（臨床心理学全書1）．誠信書房

（2008年11月5日受稿）

〈講演資料〉

Clinical Psychologist の養成とアイデンティティの発達

直井　知恵

California School of Professional Psychology

- PhD.　臨床と研究併用　A scholar Practitioner Program
- PsyD　臨床重視　A Practitioner Program
（1991に設立）4年間で終了するようカリキュラムが組まれている。
- 4年終了 35%
- 5年以上で終了65%

プログラムの目標

- PsyD　臨床重視　A Practitioner Program
  - 育成目的
  - 人間生活におけるさまざまな問題に関して
    - Critical thinking（批判的にものを見ることができる）
    - Active problem solving (積極的に問題の解決に取り組むができる)
    - 多様な背景の人々と
    - 多様な状況において
    - 発展し、変化してゆく状況の中において
    - 多様なアセスメントの方法、多様な介入方法を用い、

Identity の発達

- もともと人間に興味のある人が入る仕事。
- 人間はみな違うというのが前提。
  - e.g.Engineers,etc.（心理職につく人と興味が違う）人の能力についても。アメリカは自分について考える機会が多くある。（面接などでも頻繁に聞かれるのがあなたは何を貢献できるかということ）

選考

- 選考の段階でどうしてこの分野で仕事がしたいのか、作文、面接等で聞かれる。
- 面接　教官、と学生とで行う。個人面接　とグループ面接
- 人生の転換となった出来事、などを聞かれる

選考

- Essay Topics
- essay of 6–7 typed double-spaced pages to the following, using
- distinct sections for each part.
- A.家族、友人、仕事、生活地域を含め今までの人生を論じる。心理の専門家として仕事をしようと思うきっかけとなった経験を、さらにそれがどのような形でその決定に影響をしたのかを中心に書いでください。(at least 3- 4 pages).
- B. 多くの心理系大学院がある中で具体的にどういう理由で本校を選択されたのかを述べ、さらにプログラム、あるいは多様な背景の人々について積極的に考慮していくという本校の姿勢が学校選択においてどのようにあなたの決定に影響したかお書きください。(1 page).

環境

- 多様な環境の中において多様な経験をさせる
  - 人それぞれの違いに対する意識を高める
  - 多様な背景の人々に対する理解力、許容能力(sensitivity)を高める

環境

- 多様な学生層
- 障害を持った学生、ゲイ、transgender, 男性、女性、白人、黒人、アジア人、
- 多様な教授陣
- 障害を持った教官
- ゲイ
- アジア人、黒人、男性、女性

カリキュラム

- *Clinical Psychology*
- *授業　カリキュラム*
- *一年目から授業と臨床・実践をあわせて体験させる。*

- *多様な臨床経験を重視*
- *1)クライアント層（最低この4つは満たさなくてはいけない）*
- *多文化(民族的背景　e.g. アジア系、ヒスパニック系、黒人etc)*
- *子供*
- *大人*
- *重症症例（うつ病、統合失調症、人格障害etc.）*

カリキュラム

- *多様な介入法*
- *長期、短期、*
- *個人面談、グループ面談、*

- *多様な理論――精神分析、認知行動療法、家族療法etc.*

- *多様な場でのトレーニング*
- *地域のメンタルヘアルスクリニック、病院、高機能障害治療院、刑務所、少年院、大学のカウンセリングセンター、residential treatment centers、法関係、学校etc.*

- *2年目には卒論のテーマを考え始める授業を受ける*

Tracks

- *Child and Family Track*
- フィールドワークの50%は子供と家族問題を中心に行う
- 残りは、大人そして心理一般について行う
- 一年目からカリキュラム(面接概論、能力テスト、病理、家庭と子供の発達、、さらにフィールドワークも子供、青年を中心にしたものをとる。
- 学年が進むに従い、倫理、法律に関しても子供と家庭を中心に置いたものを取る

Child and Family Track

- セラピー方法論も　1年目　Child therapy
- 2年目　Family Therapy
- Practicum　2年目あるいは3年目どちらかはこどもと家庭を中心としたものでなくてはならない
- インターンシップ　最低50%の仕事は子供と家庭に関するもの
- 卒論　子供・家庭に焦点を当てたものでなくてはならない

Forensic Family/Child Track

- *Forensic Family/Child Track*
- 将来、子供と家庭を中心とした法心理にかかわりたい人のため
- トレーニングは法の場において子供と家庭に提供されるpsychologist としてのサービスを中心として行う

Forensic Family Track

- 1年目、2年目にはこのコース用に指定された面接概論、能力テスト、人格テスト、病理、臨床と倫理、のクラスをとらなくてはならない。また、このコース用に指定された　child therapy, family therapy のコースをとらなくてはならない。また家庭内における子供の発達に関する授業を一年のうちにとらなくてはならない。

Forensic Family Track

- 3年時における選択授業は以下の中からでなくてはならない。
- 「法廷相談(consultation)と専門家としての証言」、「方と家族」、「Legal Competence,」,[家庭と暴力]、「親権査定(custody evaluation)と調停」

Forensic Family Track

- 2年時あるいは3年時のpracticum どちらかは家庭、児童あるいは青年と法的に関係のあるところでなされなければならない。
- 4年次のインターンシップは仕事の最低25%が法的に関係のあるところでなされなければならない。

Emphasis

- Emphasis Areas
- それのみを専門にしたいわけではないが、強みにしておきたい
- Family/Child Psychology
- Gender Studies (Psychology of Women, Men, Gender Roles and Sexual Orientation)
- Health Psychology
- Multicultural and Community Psychology
- Adult Psychotherapy

Family/Child Psychology Emphasis Area

- Family/Child Psychology Emphasis Area
- 授業、フィールドワークの約20%を家族と子供を中心に行う。
- Family therapy, 児童・青年とのセラピー、児童と家族のアセスメント、カップルセラピー、または地域社会とのかかわりに関する相談 (community consultation) など幅の広いサービスを提供できるよう学ぶ。

Family/Child Psychology Emphasis Area

- そのほか、親権の査定(custody evaluation)、家庭内暴力の治療、さまざまなバックグラウンドの家庭とカップルの治療を学ぶ

Family/Child Psychology Emphasis Area

- 教授陣の研究課題はfamily interaction[家庭内における人間関係・相互作用], child psychopathology [子供の病理]、healthy/competent families [健康で機能している家庭]、gender and interaction in couples and families [性別とカップル間または家庭内での相互作用]、couples transition to parenthood[カップル/ 夫婦から親への過程]、などがある。

Gender Studies Emphasis Area

- Gender Studies Emphasis Area
- ジェンダーに重きを置いた授業、フォーラム、practicum、インターンシップ、研究の機会を提供する。教授陣の治療理論としてはフェミニスト、精神分析、家族機能論、そして社会心理見解などがある。

Gender Studies Emphasis Area

- 社会における当たり前とされてきた性別役割、社会的経験、仕事、家庭内における社会的不平等が女性や女児、あるいは男性や男児の生活にどのように影響するのかがひとつの焦点である。特にこれらの社会的要因が女性、男性のメンタルヘルスにどのような影響を与えるのかに重点が置かれている。たとえば、拒食症、うつ病、薬物依存、家庭内暴力などである。

Gender Studies Emphasis Area

- 教授陣は各々の性によって効果の高い治療法をもとめ、また男性女性生活の正確な姿を見極める理論発展、追求をおこなっている。
- 教授陣の研究内容
- 社会による性の構成、女性の一生に置ける変化の研究、十代の出産、勤労女性と役割分担の重荷、文化、人種、社会層の違いによる男性の役割の違いなどがある。

Gender Studies Emphasis Area

- このemphasis のもうひとつの目的はsexual orientation (性指向)に対する理解を深めることである。
- 授業、practicum、インターンシップ経験によりゲイ、レズビアン、あるいはtransgender 人口のメンタルヘルス問題に触れる機会を増やす。

Gender Studies Emphasis Area

- 教授陣の研究内容
- ゲイ／レズビアンのカップル、原家族との関係、親業との関係、identity、homophobia の影響、人間としての成長に及ぼすもの　などがある。教授陣はゲイにとって使いやすい機関、あるいはHIV・エイズ予防プログラムの立ち上げに貢献している。

カリキュラム

- *これを満たすため、学校がメンタルヘルスサービスをおこなっているさまざまな団体と扶助関係にある。*
- 1－3年時　practicum
- 4－5年時　internship

カリキュラム・Practicum I

- 1年――Practicum I
- 8hrs/wk　最低32週間　　週1時間の個人またはグループスーパービジョン、psychologist
- 　　に会う機会は保障されなければならない
- 　　週1時間のセミナー、あるいはワークショップ、またはほかの経験をつむ
- 　　セラピー、やアセスメントは提供できない
- 　　Clinical intake　インテーク
- 　　在宅(residential)あるいは外来の患者の社会性向上のケア
- 教育(psychoeducation)
- グループセラピーを免許保持者と共同で指導する
- ケースマネジメント
- いのちの電話など

Practicum I

- Practicum I はIntroduction to Professional Psychology と並行してとらなくてはならない。このコースはPracticum I での経験をみなで持ち寄って話し合うゼミ。

Practicum II

- 2年――Practicum II　　16hrs/wk　最低38週間　Practicum I のように週最低週一時間はスーパービジョンを行わなくてはならない。Supervisor はpsychologist でなくてもいいがあることが望ましい。そうでなければ、licensed clinical social worker あるいは、MFT,　あるいは、licensed educational psychologist, あるいはboard-eligible or board certified psychiatrist でなければならない。

Practicum II

- そのほか、グループスーパービジョン、スタッフmeeting,　ケース研究、ケースの発表、また、その機関が行う学習機会に参加しなくてはならない。
- 　　この時期に並行してSeminar in Clinical and Ethical Issues という授業をとらなくてはならない。(2学期)
- 　この授業ではスーパービジョンの使用法、インテークインタビュの行い方、ケースformulation, 診断、治療計画、therapeutic alliance, therapeutic relationship, 危機介入、セラピ終了時の注意点、psychologistが守らなければならない法律、倫理が教えられる。

Practimum III

- 3年――Practicum III　　16hrs/wk
- 仕事は上記と同じであるが、並行してAdvanced Clinical Seminar という授業をとらなければならない。Case formulation　を教えられる教官がたんとうし、学年末に行われるCPPR　(Clinical Proficiency Progress Review) に向けて、Case formulation の練習をする。このときの担当教官は自分と同じ理論の人を選ぶようにする。

CPPR

- CPPR　　目的　3年度学生として十分な臨床能力があるかどうか判断する。
- 　　学生の理論と実践統合能力を判断しまたケース発表能力を見極める。
- 　　発表に使用するケースは最低6回面談を行った行ったことがありケースを使用することができる。学校側から認知さえている機関で面談が行われたケースしか、使用することができない。
- 判断は　　1) Outstanding Progress
- 　　2) Sufficient Progress
- 　　3) Insufficient Progress, Remediation Indicated
- の3つの段階で判断される。

Internship

- Internship
- インターンシップに移行するのに満たす条件
- 卒業論文のproposal をパスしていなくてはならない
- 基礎知識のテストをパスしていなくてはならない
- advanced to doctoral candidacy の立場にいなくてはならない

Prelims

- 基礎知識のテスト
- **Preliminary Examinations** – 2 subtests taken at end of second year, required for advancement to candidacy
- 私の場合はethics, intervention, assessment, statistics の4つを受けた。

- 4年・5年――インターンシップ（年間 最低 合計1500時間、2000時間推奨）
- 条件
- スタッフmeeting, ケース研究、セミナーなどがトレーニングの最低25%を満たしていなくてはならない。
- 合計時間の最低10%はスーパービジョンに使用されなくてはならない。そのうち、最低2時間は一対一のスーパーヴィジョンでなくてはならない。

Internship

- 1. フルタイム のインターンシップ
  週40時間 最低38週行われなくてならない
- 2. ハーフタイム のインターンシップ
- 2年間行われなくてはならない
- 週20－24時間 最低38週
  二つの異なる機関で行われなくてはならない

Intership 機関

- インターンシップに関しては、機関は
- **APA（American Psychological Association-accredited by APA）かAPPIC(Association of Psychology and Postdoctoral Internship Centers)、かCAPIC（California Psychology Internship Council）の基準を満たさなくてはいけない。**
- トレーニング、スーパービジョンなどの基準が決められている

CAPIC

- **CAPIC の場合**
- 毎年この基準を満たしているか調べられる
- フールタイム face to face のスーパービジョン、最低一週間2時間
- ハーフタイム face to faceのスーパービジョン週一時間
- インターンの行う仕事の最低25%は患者と直接接する仕事でなくてはいけない。
- グループスーパービジョン、didactic（週最低4時間行わなくてはいけない、いろいろなトピックで研修を行う）etc.

Psychotherapy Requirement

- **Psychotherapy Requirement**
- 継続して自己を見つめる必要性と他者に対する理解を高めることの必要性を重要視することをかんがみ個人セラピー、あるいはカップルセラピーを一年間内において最低45時間受けることが義務付けられている。
- この45時間のセラピーは一人のセラピスト（セラピストの死など特別な場合以外は）によって行われなくてはならない。本校にかかわりのあるセラピストであってはいけない。i.e. 教授、本校の管理にかかわるものであってはいけない。

Intercultural Awareness Development

- **Intercultural Awareness Development**
- 学校側のひとつの目標が患者の多種多様な文化的背景に対応できるセラピストを育成ということに対処するもの。
- 教官によってやり方が違う。
- 力関係によって抑圧する人種とされる人種の観点からのdiscussion があり、ビデオ見てそれのフィードバックを基にしてdiscussionをしたりする。自分の他民族・人種に対する見方、偏見 などを見つめる。
- 人種・民族によっての家族関係のちがいを習い認め、セラピストとしてどのようにそれを意識しアプローチを変えるかなどを学ぶ。

Intercultural Awareness Development

- カルチャーの違いは人種・民族のみに限定されるものではない。
- ゲイ、レズビアン、障害を持った人、所得など社会階層による違いなどについても考える。

Psychotherapy Requirement

- 資格
- セラピストはセラピストとして資格を持っている、独立して仕事をしており、メンタルヘルスのフィールドにおいて博士課程修了者でなくてはならない。

e.g. Ph.D, Psy.D, MD, Ed. D.

など

その他

- その他
- インターンシップ先などでサポートグループでの話し合い
- Supervisor との問題、就職先、いかに独立するかなどをdiscussion する機会もある。
- 開業に向けpsychotherapist practice management という授業もある。

参考資料

- Alliant International University／California School of Professional Psychology web site
http://www.alliant.edu/wps/wcm/connect/website/Home/About+Alliant/Schools+%26+Colleges/California+School+of+Professional+Psychology/

ABSTRACT

The Training and Development of Clinical Psychologist

Miyako MORITA, Shiho IWAI, Hiroki MATSUI, Tomoe NAOI

How do education and training in clinical psychology postgraduate programs help students develop as clinical psychologists? The purpose of this study was to investigate how education and training in postgraduate clinical psychology programs influence students' development of identity as clinical psychologists. First, reports concerning the development of an identity as a clinical psychologist, written by students in clinical psychology postgraduate programs, were analyzed. Second, training and development of postgraduate students as psychotherapists in the U.S. was looked into, based on the experience of a guest lecturer. Results based on the analysis of the students' reports and the lecture suggested the importance of continuous self reflection and the importance of clinical experience in the field throughout the training.